第99回 常設展示

飼う・売る・愛する
―人と「ペット」の関わり方の変遷―

平成11年4月27日(火)～5月21日(金)

ペットブームと言われて久しく、最近ではコンパニオン・アニマルという呼び方も聞かれるほど、ペットは私たちの生活に馴染んだものになっています。愛らしい犬や猫の写真集が出回り、イグアナやフェレットといった日本にはいなかった動物も登場し、マンションの一室で家族のように暮らしているペットたち。まさにブームは爛熟しているといえます。

しかし、私たちはなぜペットを飼うのでしょうか？　家族がほしいからでしょうか。かわいがる対象がほしいのでしょうか。それとも……？　「ペット」は家畜や狩猟といった、人間と動物とのほかの関わり方とどう違うのでしょうか。そもそも「ペット」という概念はいつうまれたのでしょうか。

今回の展示では、ペットブームの現代、分岐点となる「ペット」が誕生した1960～70年代前後、「ペット」以前である明治から戦前、以上3つの時代区分の飼い方の実用書等を通して、人と「ペット」の関わり方の変遷を見ていきたいと思います。ペット好きの方は今まで関わりのあったペットたちを思い起こし、またペット嫌いの方はなぜペットが嫌いなのか、ペットとはなんなのか、考えをめぐらせていただけたら幸いです。

展示資料一覧

<>内は当館請求記号

１．現代のペット事情

【家族、友達になったペット】

「コンパニオン・アニマル」「パートナー・アニマル」といった言葉が聞かれるように、現代のペットは家族の一員や友達として、人間に愛されています。

１．ドッグ・ワールド

オフィス201編　成美堂出版 <Z11-B564>

26号(1997.9)「家族はいつもいっしょ　みんなドライブ大好き」

２．Cats

ペットライフ社〔編〕　ペットライフ社 <Z11-1125>

296号(1998.7)　私の愛猫写真の整理法

ペットを愛する人たちをターゲットにした雑誌は、動物嫌いな人には考えられないほどの愛情で満ちあふれています。

３．Frau

講談社〔編〕　講談社 <Z23-731>

9巻1号(1999.1.12)　いい女にはいい友だち　「うちのコ」が特別な理由―「ソウルメイト」はヒトにかぎらない

専門誌だけでなく、一般誌でもペットの特集が組まれています。

４．サライ

小学館〔編〕 <Z24-1026>

11巻4号(1999.2.18)　犬は「かすがい」

「ペットと泊まれる」老舗旅館も紹介。

【ペットの擬人化】

家族として愛するゆえに、まるで対人間のようにペットと接しようとする傾向があります。

５．ペットのための遺言書　その書き方と記入式身上書

高野瀬順子著　東京　叢文社　1997.7　79p　19cm <KD991-G16>

自分の死後にペットが困らないようにするため、後を託す人への注意書きや公式の遺言書の書き方などが詳細に記されています。前文には「家族の一員であり、人生のパートナーでもある動物を「ペット」と呼ぶことには抵抗がありますが」ともあります。

６．ペットとあなたの前世の不思議

中山雲水著　東京　太田出版　1995.7　214p　16cm　(Ohta bunko) <KD991-G9>

「ペットになる前は神様だった犬たち猫たち」「あなたのペットも身近な誰かの生まれ変わり」(目次より)なのだそうです。

７．Dog

Nature〔編〕　Nature　<Z11-B190>

Vol.1(1994)　**愛犬とあなたのためのクッキング**

愛犬と飼い主が一緒に食べられる食事を紹介しています。

【ペット・ロス】

ペット・ロスとは、愛するペットと死別した悲しみから立ち直れない状態を言い、昨今注目されています。「たかがペットの死」ではなく、家族や大切な人の死と同様なのです。

８．ペット・ロス

西宮三代著　東京　誠文堂新光社　1997.9　141p　19cm　<RB651-G231>

「ペット・ロスに陥る人たちが、…「たかだか動物」といった嘲笑をともなう世間の無理解さにおびえ、やり場のない思いに苦しんでいることをもっと理解してほしい」(本文より)

９．ペット大往生　ペットが亡くなったとき私たちがしてあげられること

ペット大往生委員会著　東京ダイヤモンド社　1997.2　190p　19cm　<KD991-G8>

ペット・ロスからの立ち直り方や、ペット葬のいろいろ、霊園の選び方などを丁寧に解説しています。

【多様化するペットの種類】

爬虫類や猛獣類など、今まであまりペットとして飼われていなかった動物、もともと日本には生息していなかった動物も、ペットとして飼われるようになってきました。

10．爬虫類とつきあう本

高田栄一著　東京　朝日ソノラマ　1991.10　173p　19cm　<RA564-E10>

「爬虫類は、動かないようでもちゃんと心をもち感情を働かせて生きている。それはイヌやネコ以上だし、人間のレベルくらいある。だから、飼う以上は“感情移入”を基本として、彼らの生命をこそ愛してほしい」(序文より)

11．ハリネズミクラブ

長坂拓也著　東京　誠文堂新光社　1997.11　110p　19cm　**(カラー・ガイドブック)**　<KD991-G20>

背中にトゲトゲの針を持ったハリネズミ。野生動物なのでスキンシップは好きではないようですが、興味深い習性や愛くるしい表情を見て楽しみます。

12. うさファン通信

ワールド・ラビット・ファンクラブ〔編〕　ワールド・ラビット・ファンクラブ

<Z11-B565>

11号(1997.5)　特集「もしもの時どうする　今どきのうーさん霊園事情」

鳴かない、臭わない、散歩不要…ということで、マンションで飼うペットとして注目されているうさぎ。うさぎ愛好家のための専門誌も出版されています。

【ペット・ビジネス】

このようにペットを愛する人たちがいるからには、当然その人たちをとりまくペット・ビジネスというものが存在します。そこでは、家族になるべきペットたちが、「生体」とよばれて商品として売られています。

13. ペットワールド

ペットライフ社〔編〕　ペットライフ社　<Z18-608>

通巻378号(1998.12)　「販売のヒント　猫生体販売のポイント」

「以前は犬に較べて猫の場合、雑種の人気が高かったが、近頃野良猫のFIV(猫エイズ)感染率の高さが知られるようになってきてからは、やはり安心な“純血種”を求める愛好家が増えている。つまり猫は「まだまだいける生体」なのだ」(本文より)

14. ペットビジネスほど素敵な商売はない　ペットビジネス成功者の報告集

宍戸啓一著　東京　エール出版社　1997.5　181p　19cm　(Yell books)

<DH475-G212>

ペットブームにともない、トリマー(ペット専用の美容師)やペット探偵など、様々な職業が誕生しました。

15. 獣医さんが教えるペットを不幸にしない法　動物たちの愛と涙の診療ノート

マキノ照夫・けいこ共著　〔東京〕　Kenプロ　1988.10　191p　18cm

<KD991-E1>

(Kou-books slim)　**発売：こう書房**

ペットとの愛情物語にひき続いて、人間の身勝手によるペットの不幸物語が語られる構成。ぬいぐるみ扱いや過保護、純血を守るために安楽死させるなど、無惨な例を多数挙げ、無責任な業者、飼い主たちへ警告を発しています。

16. 動物がかわいそう！！

矢野江利子著　東京　データハウス　1993.6　223p　18cm　<RA411-E59>

動物が好きで動物業界に就職した20才の著者が、業界の裏事情を暴露した本。ペットショップ、移動動物園、動物展、動物映画、動物のかわいいポスターなど、私たちが日頃目にしている動物たちが、じつはあくまでも商品として使い捨てされているという実態がつづられています。

２.「ペット」の誕生

【「ペット」ということばの一般化】

現在ごく普通に使っている「ペット」ということばが定着したのは1960年代後半からのようです。

17. ペットのあるくらし

ペットのあるくらし社　<Z11-388>

1巻1号(昭43.11)

ファッション記事や料理の作り方など、高級感ある暮らしを演出する雑誌です。ペットが「いる」のではなく「ある」ところが、現代の家族としての位置とは違うものを感じさせます。

18. ハローペット

中込英次事務所編　共立商事　<Z11-1158>

10号(Summer 1979)

人気スターとペットの記事が多く、愛好家が自分で参加する現代のペット雑誌とは違う印象があります。

19. ペットの百科　選び方・飼い方・ふやし方

宇田川竜男著　東京　西東社　1971　378p　図　19cm　<Y78-1347>

野生動物の取引を規制したワシントン条約以前ということで、この時期のペット本は珍獣も多く、ワニなどもすでに登場しています。「今から10年ほどまえに、私は動物飼育についての本を出版しました。そのとき「ペット」ということばを使いたかったのですが、当時はまだ「ペット」ということばが一般化されてなく、使わずに終わったことをおぼえています。」

20. ペット犬の育て方

原田知明著　東京　学習研究社　1970　263p(図共)　19cm　(学研ファミリー)　<Y78-1183>

ペット犬＝小型犬のことのようです。「本書は、犬で利益をあげようというかたたちを対象にしてつくられたものではなく、ほんとうの愛犬家、つまり、犬の飼育を家族じゅうで楽しみながら健

全な趣味として、あるいは家族の一員に加えて生活をエンジョイしようというかたたちを対象にしてつくりました。」

21. ペットマガジン

蒼洋社　月刊 <Z11-223>

1巻1号(1966.9)

内容は観賞魚が中心で、観賞魚がペットの代表格であったことがわかります。

【ペットとは愛玩動物である】

ペットということばに先だって、飼い方の実用書では「愛玩」「副業や利益のためではなく」といった言葉が多くみられます。産業の発達により動物を使役する必要が減ったことで愛玩のためだけの動物が普及し、また生活が都会化していくこともあって小さな動物が求められるようになったのでしょう。

22. 愛玩犬読本

誠文堂新光社愛犬の友編集部編　東京　誠文堂新光社　1961　219p　図版16枚　18×19cm <645.6-Se118a>

「近年小型愛玩犬の要望がとみに高まりつつある…人口の都会集中が激しくなり、従って大都市における住宅難の声は高く…」(本文より)

23. いい犬わるい犬

高木一嘉著　東京　芸術生活社　1972　215p　18cm <Y78-1608>

「小型愛玩犬がペットのスターダムにのしあがる社会事情があるのです」

24. 小鳥　飼い方の手引

誠文堂新光社農耕と園芸編集部著　東京　誠文堂新光社　1957　136p　(図版32p共)　18×19cm　(園芸手帖) <646.8-Se118k>

駅や喫茶店、病院などで小鳥を飼い、都会生活にうるおいを与えている姿が紹介されています。

25. 趣味の熱帯魚と金魚

牧野信司著　大阪　保育社　1958　206p　図版10枚　19cm <663.9-M161n3>

戦前は一般的には高価で手がでなかった熱帯魚ですが、「世の中がおちついて、どうにか生活にうるおいが出てきた 1949 年ごろからぼつぼつと一部の人にみいだされ、話題にのぼるようになりました。」

26. 猫

井伊義勇著　東京　角川書店　1958　216p　19cm(角川新書)　<645.6-I161n>

古来から生活になじんでいる猫ですが、意外にも飼い方本はほとんどありませんでした。戦後、猫にまつわる読み物の中に飼い方を指南した本が見られるようになります。この本では「猫のこころ」「猫の神秘・不思議」などの読み物のあとに、「猫の飼い方」の章が設けられています。

３.「ペット」以前のペットたち

それでは「ペット」ということばができる前は、家庭で飼われる動物と人はどのようにつきあっていたのでしょうか。明治から戦後の資料を紹介します。

【小鳥・金魚】

小鳥と金魚は江戸時代から親しまれ、飼われていました。園芸のように、品種改良なども楽しみの一つだったようです。また、かわいがるばかりではなく、家庭で繁殖して売るという副業の１つでもありました。

27. 小鳥と金魚

宮崎三味(璋蔵)，安藤直方(紫陽)著　東京　裳華房　明37.7　136p　19cm

<YDM64751>

「山にも水にも遊ばずして居ながら斯る快楽を自儘にする事、これや彼の紳士の楽と呼ばるる書画骨董の上にも越すべき」(序文より)巻末には牡丹・朝顔栽培や盆石の記事もあり、園芸や書画骨董と同じような趣味の一つであったことがわかります。

28. 金魚とその飼ひ方

白木正光，秋山吉五郎著　東京　文化生活研究会　大正15　190p　19cm　(趣味の副業叢書　第3篇)　<548-60 -(3)>

この『趣味の副業叢書』の第１篇は「養兎の手引」、第２篇は「副業としての飼鳥」で、小動物の飼育が副業になっていたことがわかります。とはいっても、本文には「愛すれば愛する程親しみの念が加はり、殊に金魚は無心の花と違つて、主人に次第になれ慕ふやうになります」と親愛の情がこもっています。

29. 年益千円も挙げる小鳥の飼ひ方　素敵に儲かる副業案内

家庭副業講習会編　東京　青山堂　昭和元　192p　20cm　<564-197>

「国利民福の増進を図らんとす」るために、養豚、メリヤス製造、下宿屋等、様々な副業を案内した本。その筆頭としてタイトルにもなっているのが、小鳥の飼育です。

30. 趣味の小鳥

松山思水著　東京　実業之日本社　昭和2　204p　図版10枚　肖像　18cm

<564-232>

「副業」の反対語として「趣味の」というタイトルなのでしょう。「小鳥の流行と共に、仔引を副業とする人が大分出て来ました。…金儲けと云ふやうな不純な考を一掃して、眞に小鳥を愛することを皆様にお願ひしたい。」(序文より)

【いぬ】

ペットの代表格・いぬ。やはり昔から愛されていました。ただし、やはり実用面での記述が目につきます。

31. いぬ

足立美堅著　東京　大日本農会　明42.7　256, 15p　23cm　<YDM64604>

付：農学士足立美堅君小伝

詳細な飼育法が載っていますが、犬の歴史、種類別の紹介(蓄犬、猟犬、番犬、愛玩犬)など、犬全般に関する学術書といった趣。

32. 犬の飼ひ方

高橋虎雄著　東京　文化生活研究会　大正15　195p　図版　19cm　<564-72>

「家庭の犬は子供の愛情の練習帳」「大型犬は都会に向かぬ」「元来人間と申しますものは、何か愛の対象物が無ければ、淋しくつて一日も居られるものでありません。現に私は子供がありませんので、犬を家庭の一員として子供の様に育てて居ります。」と現代にも通じる記述が見られます。

33. 犬を飼ふ人のために

木下豊治郎著　東京　カオリ社　昭和6　161p　19cm　<606-185>

「自分の犬を手塩にかけて育てあげた上、これを他人に売るとなれば、誰しも愛着を感ぜぬものはありますまい。…しかしながら…売買となれば当然そこに駆引があり、商売気たつぷりとなることは他の商売と何の変りもない。」(本文より)

34. 犬の研究

犬の研究社　17巻1号(昭16.7)　<雑42-194>

表紙には「軍用犬・警察犬他犬の総合雑誌」とあります。表紙を飾る写真は当時流行のシェパード。なお、巻末に「愛犬や愛猫が死にましたら、当寺へ」という、はやくもペット霊園の広告が見られます。

【ねこ】

いぬとならんで親しまれてきたねこ。でも飼い方の実用書はあまりありません。

35. 猫ノ疾病及治療法

石山寛信著　東京　長隆舎　大正12　125p　18cm <385-263>

「鼠ノ駆除及婦女子ノ愛玩ノ為廣ク人家ニ蓄ハルルニ至レリ而ルニ此ガ猫ニ関スル著書ヲ見ザルヲ遺憾トシ」(序文より)と猫本の少なさを嘆いています。専門家向けの獣医学書です。

36. 愛翫動物

白木正光著　東京　春陽堂　昭和5　580, 9p　20cm <606-45>

「家庭愛物の双璧」としてねこが紹介されています。「主として婦女子の愛撫を受け、その方面に絶大の人気を持つてゐます」とあります。

【うさぎ】

おとなしく、マンションでも飼えるペットとして現在、人気上昇中のうさぎ。飼育の歴史は古いのですが、その目的は愛玩ではなく、毛皮用、食肉用、実験用にする家畜としてでした。この傾向は昭和 40 年代ごろまで続きます。

もともと、兎は明治になってから注目された動物です。明治 2〜3 年頃、愛玩用の兎が輸入され、輸入兎が熱狂的に売れ、また暴落するという時期がありましたが、明治 9 年の養兎取締令によりブームは終焉、その後、政府の法律顧問のフランス人が家畜としての養兎を推奨し、取締令を廃止したことで家畜としての兎が誕生した、という経緯がありました。

(「最新兎の飼ひ方」市川俊次著　昭和 10 年<683-139>による)

37. 実用兎飼養新書

井上竜太郎著　東京　井上竜太郎　明22.10　49p　18cm <YDM64791>

兎は草食で飼育が簡単なため、日本農業の不振を救う家畜として最適とのこと。

38. こんな有利な兎の飼ひ方と売り方

瀬尾肇著　東京　康業社　昭和9　154p　19cm <675-118>

「兎肉雑煮」、「兎肉のスチウ」、「酢の物」などウサギ肉の食べ方も紹介しています。「全く兎肉は鶏肉に匹敵するものでありまして、牛豚のはるかに及ぶところではありません」。

39. ホープアンゴラ　兎毛と飼養法

藤原政雄著　東京　誠文堂新光社　1960　108p　19cm <645.7-H991a>

女性がアンゴラ兎を抱いてほほえんでいるファッショナブルな表紙ですが、このアンゴラ兎はあくまでも紡績資源であり、本文もアンゴラ飼育企業のために書かれています。

40. 兎の飼育と経営

柿沼成文著　東京　地球出版　1967　218p　図版　19cm　<645.7-Ka215u>

「戦後わが国の養兎界はまことに順調な発展をとげつつある。…戦争中はまだ養兎といえば毛皮を中心として考えられたものだが、いまでは兎肉を中心として考えられるほどに変ってきた。」(本文より)

結び．動物とよりよく共生するために…

「ペット」と一口に言っても、意外な経緯をたどった動物もあることがおわかりいただけたと思います。家畜などの実用目的から家族へとペットは変遷し、人間に対等になったかに見えます。しかし、本当にそうでしょうか。家畜とはいっても戦前の資料には愛情が感じられないわけではなく、家族とはいってもペットショップで買われて売れ残りは処分される現実があります。この境界線はじつにあいまいといえるでしょう。人間がペットを飼うことには必ずやなんらかの矛盾がある、そのことに気づきはじめた人たちにより、様々な模索がはじまっています。

41. アニマル・セラピーとは何か

横山章光著　東京　日本放送出版協会　1996.12　238p　19cm　(NHKブックス)

<SB237-G155>

ペットを飼うことで心の傷を癒やすという精神療法が注目されています。ペットを飼っている人のほうがストレスが少ないことに関する研究や、老人ホームや病院をペットが訪問する運動がすすんでいます。その一方で、動物をどこまで利用していいのか、ペットに無理をさせないためにはどうすればいいのかも考えなければいけません。

42. アニマルライト犬との暮らし方全書　あなたの犬は本当に幸せ！？

動物との共生を考える会著　東京　緑風出版　1995.3　187p　21cm

<RB651-E407>

(プロブレムQ＆A　8)

品評会の批判やアニマルライト(動物の権利)運動、捨てられたペットが動物実験に使われていること、食用犬のことなどにも触れた、問題提起型の愛犬本。

43. 消費者法ニュース

38号(1999年1月)　特集　ペット法学会設立とペット法の課題　<Z2-1684>

「動物の保護及び管理に関する法律」を改正しようという動きがあります。現状では、動物虐待や遺棄を罰する規定があっても実務上ほとんど使われることがなく、事前にそうした悪徳業者や無責任な飼い主を防ぐ体制もできていません。

44. Sinra

新潮社〔編〕　新潮社 <Z14-B65>

6巻2号通巻62号　(1999.2)

「猫がいる町がいい！　住民が共同で世話する「地域猫」誕生」

個人ではなく地域で猫を飼うという画期的な試みがいくつかの自治体で行われています。

人間に捨てられて野良になった猫に避妊手術をするなどして更なる野良猫の増加を防止し、一代限りの面倒を共同で見ようという、動物嫌いの人にも納得がいくようなやり方です。一時的にかわいがったり迷惑がったりするのではない、動物と人間がよりよく暮らしていく一つの形といえます。

◎請求記号が YDM ではじまる資料は、マイクロ資料でのご利用になりますので、展示期間中でもご利用になれます。

国立国会図書館 03-3581-2331(代)
ホームページアドレス http://www.ndl.go.jp